

同志社大学国文学会彙報

昭和四十一年度国文学会役員

会長

常任委員

土橋 寛

南波 浩

小森 啓助

安永 武人

広川 勝美

八木 良夫

宮下 隆夫

上田 吉晴

太田 正道

口羽 義三

河村 秀子

佐々木 睦浩

鷲見 貞夫

二十八名

評議員

昭和四十一年度国文学会活動状況

八月十九日 京都府立勤労会館

教学体制の問題

同志社大学文学会彙報

—学園民主化への道—

生活指導の問題

組合をめぐる問題

十一月二十八日 同志社大学尋真館

挽歌における抒情の成立

有島武郎論

作文教室について

十二月十五日 同志社大学弘風館

現代における古典文学研究の意義(講演)

神戸大学教授 永積安明

昭和四十年卒業論文題目

「蜻蛉日記」の世界

広告文章とはどんなものか

源氏物語「浮舟」

田宮虎彦論

「若菜」論

西鶴の女・近松の女

好色五人女

徒然草考

樋口一葉論

佐野 禎治

犬島 良二

内田 満

駒木 敏

内田 満

寺岡 信子

赤松 順子

秋元 史子

坂東 国洋

堂本 美舟

遠藤 洋一

藤井 節子

浜崎 嗣志

春山 和子

服部 邦子

樋口 一葉論

徒然草考

好色五人女

西鶴の女・近松の女

田宮虎彦論

芭蕉論	松垣 宏	「日本永代蔵」の考察	宗重ハル美
百合子の創作態度、方法への一考察	平尾 やす子	閑吟集の世界	中井 一江
平家物語の女性像について	堀場美恵子	芥川龍之介論	中村 節子
芭 蕉	堀井 宏憲	二葉亭四迷	中山 桂子
教科書のことばの変遷	乾 瑠 美	芥川龍之助	中沢 光雄
『世間胸算用』における西鶴の人間観	岩田紀代子	石川啄木における国民文学の可能性	広田真智子
「平家の悪口」の意味について	鎌 田 光子	二葉亭四迷にみる国民文学への可能性	西沢 祥子
平家物語における武士道	河瀬 節子	野上弥生子	丹羽 順子
山上憶良論	川 副 洋子	夏目漱石論	丹 羽 昇
万葉集挽歌について	木谷 真也	源氏物語夕顔論	野村 洋司
源氏物語——薫の人間像	古茂田誠子	平林たい子論	岡田賀津子
道綱母の人間像	神代マサ子	「浮舟」の人間像	小野田明子
大江健三郎	久米 芳紀	上田秋成論	小坂田紀世
世阿弥	前川 正子	鷗外に於ける自己覚醒と自己挫折	大藪 滋子
椎名麟三における笑い	松田 佐保	樋口一葉文学への一考察	小沢 直子
源氏物語	松田 徳子	「土佐日記」の文学的意義	斎藤 和子
平家物語	松村 暢夫	「今昔物語」における盗賊の物語	佐多 尚子
近松の世話悲劇に於ける人間性	三村 信子	『黒潮』について	関 口 徹
伊勢物語の考察	三浦 繁子	樋口一葉論	勢山登代子
野上弥生子論	森川 典子	宮本百合子論	下田 育子

安部公房論

道綱母の人間像

古今集恋歌の世界

和泉式部日記論

西鶴町人物

徳田秋声の創作方法

人麻呂挽歌について

三島由紀夫論

平家物語に於ける生死

世阿弥の能

太宰治論

野間宏論

平家物語に於ける義仲と義経

藤村文学における「家」の問題

「新生」論

石川達三論

有島武郎論

紫上の出家

二段活用動詞の一段化について

蜻蛉日記作者の求め得たもの

杉尾 幸正

杉坂 令子

高橋美恵子

高畑 泉

高岡美和子

高嶋 加衣

竹雅 絃平

竹崎 和夫

田村智恵子

田村 洋子

丹波 英緒

谷 世志子

立神 淳子

寺田 恭子

坪井貴美恵

内山 芳樹

上埜美智子

和田 映子

山本 国恵

柳原 優子

平家物語における清盛・義仲像

平中物語の考察

太宰治と郷土

宮本百合子論

則天去私と「明暗」の方法

太平記の人間像

田宮虎彦文学への一考察

椎名麟三論

三島由紀夫ノート

二葉亭四迷論

中野重治「芥藤茂吉ノート」論

田中英光論

国木田独歩論

宮沢賢治論

明治初期における新聞の文章変遷に関する一考察

三島由紀夫作品論

大江健三郎論

有島武郎と作品「或る女」

徒然草私見

余伝寿美子

吉田 豊子

阿倍 隆

塹江美沙子

兵頭典江

亀田 良行

北岸 悦二

窪田 敬生

佐藤慶樹

新保 昭夫

大村 千恵

清谷 寿

柴田 弘子

大野 雅子

平野 吉三

大木利佐子

大槻佳代子

佐々木雄三

佐藤 克子

「破戒」について

高木良雄

宮本百合子の三つの作品の分析と問題点 高崎 禎夫

好色五人女 田中 庸 皓

『義経記』における義経の人間像 植田 洋 子

日本の社会に於ける新古今時代の自然 池 坊 専 孝

(前号のこの欄、昭和四十年度となっていますが、昭和三十九年度の誤りです。お詫びして訂正いたします。)

執筆者紹介

黒 沢 幸 三……………昭和四〇年度大学院
(修士課程)修了生
奈良商業高校教諭

広 川 勝 美……………本学助手

内 田 満……………昭和三十五年卒業生
平安女学院高校教諭

安 永 武 人……………本学教授

徳 永 光 次 郎……………昭和三十二年卒業生
桃山学院高校教諭

土 橋 寛……………本学教授

投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場であり、進んで御投稿下さい。枚数は四百字詰原稿用紙三十枚〜四十枚。第三号締切は九月末日。ただし掲載論文の数には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任して下さい。